
夕方の理科準備室

こいん0712

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕方の理科準備室

【Nコード】

N8661K

【作者名】

こいん0712

【あらすじ】

不良校で教師をやっている主人公大槻湊
理科準備室で泣いてると一人の生徒、結城にいきなり告白される
湊はどんな答えを出すのか
ちよっぴり悲しいラブストーリーです

第1話 理科準備室(1) (前書き)

どうも、こいん0712です

初めて、女性目線で小説を書いたので下手かもしれませんがよろしくです

第1話 理科準備室(1)

私は、おおつきみなと大槻湊

西木浜高校(にしきはまこうこう)で理科の教師をやっている
年は24歳

見た目は、ロングヘアーの黒髪で顔は普通と思う。身長は、16
5センチの普通サイズ
スリーサイズはヒミツ、足は、25センチ
自己紹介はこれくらいかな？

キンコンカンコン
今、授業が始まった

「でさー、」

「マジで、キャハハハハ」

「この、ページまじやべえよ」

「うおっ超セクシーじゃん」

「だろっ」

相変わらずうるさい

「はい静かにしてー」私が注意をすると

「うるせえーババあ」「ひっこめセンコー」

その言葉と一緒に一人の生徒が、缶ジュースを持って私に近付いて
来た

「先公だからって調子に乗るなよ」

生徒が缶ジュースを開けて私にかけてきた
ジョボジョボジョボ

私の、頭から床にジュースが流れる

「冷たっ!」

「イイゾー、神野」

「イエーイ、」神野がガッツポーズをした

もうこんなの嫌だ！！

私は、教室から出て行った

何でこんな思いしなきゃいけないの！？

私は、廊下を走って屋上に向おうとした。何か一人になりたくて涙が出てきた。ジュースを掛けられたのは初めてだったけど、毎日こんな感じだ

私は、ゆっくりと歩いた

涙が止まらない。憧れの先生がこんな辛い物だっと思って思わなかった。でも、ここが特別なだけかもしれない。ここは、今時珍しい不良校だから・・・はあ何でもっとまともな高校に勤めなかったんだろうそして、歩いていると普段は閉まってるはずの理科準備室のドアが開いていた

私は、そつと覗いて見た

誰も居なかったので、私は、理科準備室に入った

そして、カーテンを閉めて置いていた、ほこりが被っているジャージに着替えて、水道で髪の毛を洗った

「はあ、」ため息をついた

もう学校辞めようかな・・・でもやっと昔からの願いが叶ったのに簡単にあきらめていいのかな？

「はああ~~~~」さつきより長いため息をついたら涙が出てきた

私が泣いてると、「ガラッ」ドアが開いた

「誰っ！？」

「先生？」

そこには、一人の生徒が居た

ヤバイっ見られた明日からこの事でまた馬鹿にされる

その生徒が、ドンドン近付いて来る。しかも、缶ジュースを2本持っている

また、掛けられるのだろうか……
ドンッ

「えっ？」私は、思わず口に出してしまった

彼が、私の横に座っていたからだ

「どうして、泣いてるの先生？」

この子、よく見たら私の授業を真面目に受けてくれてるさえじま ゆつき冴島結城君だ
見た目は、やっぱり不良だから金髪にピアス、顔は結構なイケメン
身長が180センチくらい

確か……2年生の番長だとか

「いやっ……ちよつとね」

「クラスの奴等でしょ。ジューズ掛けられてたもんね」

「うん……」

この子、こんなに優しい子だったんだ。もっと怖い子だと思ってた
けど。

「これ、あげるよ」

「ありがとう」

結城君からジューズをもらった

「あゝオイシ」

「でしょっこれ、俺のお気に入りなんだ」

「へえ」

他愛無い会話が続く

何か結城君と話していると落ち着くな

もう、夕方か。彼と話している、いつの間にかこんなにも時間が
絶っていたんだ

そしていつの間にか、彼に生徒の事を相談していた

何言っただろう私生徒に自分の悩み相談してんだろっ

「なあ先生？俺じゃダメかな？」

「何が？」

「先生を、支えるの俺じゃダメかな？」

「えっ!？」

えええええええつ！！！？もしかして、告白？

私が驚いていると

結城君の顔が私の目の前にあった

そして・・・二人の唇が重なっていた

「キヤッ」私は、結城君を突き飛ばした

「痛ててて」

「ゴメン・・・」

やつぱり、さっきのは告白だったんだ

「わかつてると思うけど私達は、教師と生徒なんだよ？」

「そんなの関係ないよ。俺が先生を好きな気持ちは変わらない」

また、結城君が私にキスをしようとした

「やめてっ！！」

私は、結城君を突き飛ばした

「ゴメン先生。俺もさ、何回も先生のこと諦めようとしてるのに、

ダメなんだ先生の事諦めれない」

「少し考えさしてくれないかな？」

「うん・・・いい返事待ってるよ」

彼は、そう言つて準備室から出て行つた

まだ、キスの感触が唇に残っている

それから、家に帰っても私は彼の事を・・・結城君のことを考えて

いた

第1話 理科準備室(1) (後書き)

最後まで読んで下さってありがとうございます

感想、アドバイスよろしくお願いします

第2話 理科準備室(2)

「失礼しまゝす」結城君が、職員室に入って来た

昨日の事もあつて、かなり緊張する

「大槻センセ。ここ解らないんだけど教えてよ」

「へっ?」

「そんな、マヌケ面してないでさっさと教えてよ」

「うっうんゴメン」

てつきり、昨日の答えを聞くために呼び出されたと思つてたから変な声でちゃった

「ここはね……………」

結城君がワークの左端を指差す

ワークの左端には「昨日の返事聞きたいから、また夕方理科準備室に来て」と書いてあつた

私は、オッケーと周りに見られないように手でやった

「なるへそっそういう事ね。ありがとうセンセ解らなくて夜も寝れなかつたんだありがとう」

と言つて結城君は、私に紙をクシャクシャにした物を投げてきた

「じゃあ、失礼しました」

そう言つて結城君は職員室から出て行つた

スゴイ高得点のオンパレードだ。いくら不良校とはいえどテストのレベルは、普通の高校と一緒ぐらい

それで、あんだけ点数取れるって結城君スゴいんだな私は、心の中で頷く

結城君って不良なんだけど、不良じゃないって感じなんだよな、優しいし

そんな事を思っていると夕方ぐらいの時間になっていた

よしっ、準備室に行こう

私は、周りにバレないように慎重に職員室を出た

「冴島君いる？」

「いるよ」

結城君の声がしたので、私は、準備室の中に入った

「じゃあ、答えを聞かせてもらっていいかな？センス」

「そんなにあせらないでもいいんじゃないかな？まだ、心の準備出来てないし」

「しょうがないな、センスはじゃあ心の準備が出来るまで話しようか」

「嫌っやっぱり今言っ」

今言っとかないと、心臓がバクバクで破裂しそう

「じゃあ、答えを聞かして」

「・・・ゴメンっ君とは付き合えない。やっぱり生徒と教師がそんな関係になっちゃダメだよ」

「そうか」やっぱりそうだよ。でも先生の答え聞けて良かったよ。今度からは俺近付かないから

安心して、じゃあねえ」結城君は、泣きそうな顔で行った

これで、良かったんだよこれで。だって私は教師、結城君は生徒だもん

でも・・・この関係が無かったら私達付き合ってたのかな？

第2話 理科準備室(2) (後書き)

最後まで読んでくれてありがとうございます

感想、アドバイスよろしくお願いします

第3話 寂しそうな彼（1）（前書き）

どうも、こいん0712です

この小説は短めの連載小説になると思います

それだけです・・・はい

なんか、スイマセン

第3話 寂しそうな彼（1）

結城君を振ってから一週間が経った

あれから、結城君は一度も見えていない

あんな顔で出て行ったから嫌でも気になる

あんなに、結城君真面目に授業受けてたのにどこ行っただろう？

「えつと理科準備室の鍵は・・・あった」

私は、職員室から鍵を取って準備室に向かった

やったー明日は実験の日だ

あんな不良達でも実験は真面目にやってくれるんだよね
だから、かなり楽なんだよね」

力チャ 私は、鍵を開け中に入った

「えつと・・・ピーカーはどこに置いたっけな」

ガタッ

私が、明日の実験の準備をしてるといきなり物音がした

「誰かいるの？」

「いるよ。もう出て行くから続けて」

そう行つて、準備室の奥の方から結城君が出てきた

結城君一応学校には来てたんだ

私は、心のどこかで安心した

「出て行くって・・・いいよここにいても」

「言っただしょ。もう、先生には近付かないって」

結城君は、寂しそうな顔をした

まるで、知り合いが死んだ時のような生気がまったく無い顔

そんな、顔されたら私のせいみたいじゃない

私は、結城君の手を掴んだ

「離してよ先生。」

「ちょっと話しようよ」

「嫌だ・・・」

「何で？」

いいじゃん別に話ぐらい減るもんじゃないし私は心の中で呟く

「まだ、先生の事諦めきれてないんだよ。先生と居ると胸が苦しくて・・・」

先生は、軽い気持ちで俺を振ったかもしれないけど俺は、^{マジ}そんだけ本気だったんだよ」

軽い気持ちってなあ？こっちが、どれだけ考えたか知ってるの？考えすぎで少し頭痛くなっただからね包丁で指切ったし・・・でも、傷ついたのは彼なんだよね

「結城君？」

結城君を見ると泣いていた私に腕を掴まれながら、号泣までいかなかったけど泣いていた

「先生、手離して、これ以上手掴まれてると先生を諦めなくなるから」

結城君が、泣きながら言う

「少し、話しようか・・・」私はさっきより優しい声で言った

結城君はゆっくり首を縦に振る

私たちは、ゆっくり準備室の奥のほうで座り込んだ

「ねえ、何で結城君は私のこと好きなの？」

「言っても意味無いよそんな事、先生が付き合ってくれるなら言うけど」

何だと！？このクソガキがあ！！！！
でも、そんなこと口にだせない

「そっか・・・」

私達は黙り込んだ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いつの間にか、夕方。結城君に告白された時と一緒にだなあ

「先生・・・俺帰るね。これ以上俺が先生と一緒にいるとマジで襲っちゃうからさ」

何て冗談言ってるけど顔がかなり寂しそう

「うん・・・バイバイ」私達は、手も振らず言葉だけで別れた

ガラッ結城君がドアを開けて外に出て行った

その後私は、実験の準備を続けた

第3話 寂しそうな彼（1）（後書き）

最後まで、読んでくれてありがとうございます
感想、アドバイスよろしくです

第4話 寂しそうな彼(2) (前書き)

どうも、こいん0712です

本当は、7話ぐらいで終わらせるつもりだったけど無理っぽいかな？

第4話 寂しそうな彼(2)

「あゝーオイシ」

結城君にこの前もらったジュースをコンビニで買って飲んでいた

ザーザー

えっ嘘雨降ってるよーもう最悪。天気予報じゃあ今日一日中晴れって言ってたのに

私は、しょうがなくコンビニで傘を買って家に向った

はあー雨はテンション下がるな結構な大降りだし

まっコンビニで買い物してる時だったからよかったけどさ

川も結構流れが速くなってきている

私がトコトコ歩いてると、制服を着てびしょ濡れになりながら歩いてる学生が居た

・・・・・・よく見たら結城君だ。

私は、無視して結城君を抜かそうとすると、結城君は川原の方に向っていった

まさかっ自殺するんじゃないや・・・

私は、見つからない様についていった

結城君を観察していると、石を手に取り何回も何回も川に叩きつけ

て
い
た

ストレス発散だろうか？あれ楽しそうだな。私は、そんな軽い感じで見ている

「ああああ！！！！！！！！！！」今度は、何か叫びだしたあれも、ストレス発散かな？

彼のセットしている髪が雨でグシャグシャになっている

結構、髪長いんだ・
・
・
・
・

もう帰ろう。私が歩き出そうとした時

「先生―好きだー!!」 また、結城君が叫んだ

雨音で何言ってるかサッパリわからなかったけど叫んだ事だけはわかった

結城君の顔をよく見てるとまだ寂しそうな顔をしている私に振られたからかな？それとも、別の理由かな？

叫んだ後、結城君は道路に戻りまた、歩き出した

私は、すかさず付いて行く

私は、濡れてる結城君を見てられなくなり話かけた

「風邪ひくよ？」

「いいよ別に、死ぬわけじゃないし」

「風邪をバカにしちゃあいけないよ。風邪で死ぬ人もいるんだから」

「だから何？別に俺が死んでもいいじゃない。アンタには関係ないだろ！」

結城君は怒ってるのかな？こんな結城君見た事無いからわからないでも、顔は怒ってるよ。怒ってる結城君なんだか怖い

「俺は、もうアンタの事なんとも思っていないから心配しないでイイヨ。よかったでしょ？うつとうしい生徒が一人いなくなったんだからさあ・・・とにかく、もう俺も喋りかけないからそっちも、喋りかけないでくれるかな？俺の事なんとも思っても無いのにそんなに付きまとうなよ！！」

「ゴメン・・・」この一言しか出なかった

「じゃあね、先生」寂しそうな顔で結城君はどこかに行こうとしたその顔ずるいよ結城君、そんな顔されたら守ってあげなくなるじゃない、抱きしめなくなるじゃない
こっちまで、君のこと好きになっちゃうじゃない・・・

私の体は勝手に動いていた

「結城君、私ね・・・結城君の事好きになっちゃったみたい」
私は、結城君を後ろから抱きしめていた

「先生、冗談はやめてよ」

「冗談じゃないよ。私の確かな気持ち、本当の気持ち」

私は、結城君をこっちに向かして制服のネクタイを引っ張り強引にキスをしていた

傘を差していないので二人とも濡れている

冷たいでも、結城君は暖くて気持ちい

ああ、やっぱり結城君の近くにしていると落ち着くなあ

「センス、嬉しい。でも……いいの？俺達生徒と教師なんだよ？」

「そんなの何とかなるよ。そんな事より大事なのは本人の気持ちでしょ」

正直不安だよ。7歳年下でしかも自分の生徒と恋愛をするのなんてさでも……結城君のこと好きになっちゃったから仕方ないのかな？

「先生、大好き」結城君が、私をギュッと抱きしめた
明るい笑顔で

やっぱり、結城君は笑顔が似合うよ」

第4話 寂しそうな彼(2) (後書き)

最後まで読んで下さってありがとうございます

この小説はそんなに執筆時間がかからないので書くのが楽しいです
感想、アドバイスよろしくです

第5話 キミノコト教えて？

あーもう服びしょびしょだよ。結構お気に入りだったのにさ
結城君に抱きついた時、傘離しちゃったからなあ

「センス、シャワーありがと」

学校のジャージを着ている結城君が脱衣所から出てきた

今、結城君私の家に居るんだ

風邪ひかれたら困るからシャワーを浴びてもらってたところ

「じゃあ、私もシャワー浴びてくるね。適当に座つといて」

「うん……」

私は、びしょびしょの服を洗濯機に入れ、風呂場に入った

ジャー 蛇口をひねるとあつたかいお湯が出て来た

あー気持ちな」

私は、髪の毛を洗い出した

私は、ふと思う

シャワー浴びるって、あれをする前のカップルぽくない？

そう考えると、ドキドキしてきた

でも、付き合おうって言うってから、1日も経ってないし大丈夫だよ
ね。うん大丈夫

私は、心を落ち着かせ髪の毛を洗う

「あーサツパリした」

まだ、さっきの事を考えていた
顔赤くなつてないかな？

体と髪を拭いて脱衣所から出ると、結城君がベットに座っている
何で、結城君私のベットに座つてんの！？
適当に座つとけとは言つたけど

えつまさか結城君、やる気じゃないよね！！？
ちよつそれは、早すぎるって私達お互いの事まだ何にも知らないんだから

私は、ゆっくり結城君の横に座つた

「結城君・・・」

「何、センセ？」

結城君はすつごい笑顔で答えた

「まだやるのは早いんじゃないかな」

「何が？」

「その・・・エッチな事というか」

「そんなことする気ないよ。まだお互いの事なんにも知らないのにさ。先生がしたいってなんならするよけど」
結城君は、顔を少し赤らめながら言う

「したくない、したくない。一生つてわけじゃなくて・・・今はつてことだよ」

そっかー、そうなんだ良かった結城君が襲ってきたら、止めれる気しないもん

「わかってる。時期がきたらしようねっ」

「何言ってるのよバカっ！」

「へへっ」結城君は笑った

やっぱり結城君と喋っていると落ち着くな、地味に下ネタが入ってても

「何で結城君私のベット座ってたの？」

「何ていうか先生がどんどこで寝てるんだろなって、思うところに座ってた」

「そうなんだ・・・」

何か恥ずかしいな。人が私のベットに座るなんてないから

「あのさ、もう一つ聞いてもいい？」

「質問によるけど・・・」

「昨日も聞いたけど何で私の事好きなの？」

私と結城君は、この前理科準備室で話したのが初めてだったから何で私の事好きなんだろうつてずっと思ってた

「先生、俺達不良にも、真面目に授業してくれるじゃん。ほかの先公はもう投げ槍って感じでダメだもん。んで俺も真面目に授業受け

なきやなっと思って授業受けてたら、授業じゃなくて真面目な先生に集中するようになって、それから先生の事かawaiiなっと思ってたら、仕草や口元も見erようになってた。で理科の授業が楽しみになってさ。それで時間が経つにつれて俺は、先生が好きなんだなっと思って、本当は黙っところと思っただけ、その思いが押さえ切れなくなっ告白しちやっただ」

そんなに私の事想ってくれたんだ、見た目は少し不真面目そうだけど結城君結構、純情なんだ

「ありがとう、私の事そんなに想ってくれて嬉しいよ。私は、結城君のことあんまり知らないけどこれから、もっと結城君のこと知れるように努力するね」

「ありがとう。でも、そんなにあせらないでもいいよ。俺が先生のこと好きって

言うのをわかっててくれたら、いいからさ」

「うん……」

私は、いつのまにか涙が出ていた。多分嬉し涙

「何で泣いてるの先生。俺、泣かせるようなこと言っちゃった？」

「ううん違うの結城君がこんなに、私の事想ってくれてるんだっと思うと嬉しくって。涙が出てきちゃって」

本当に嬉しいこんなに嬉しいのはいつぶりだろっぐらい嬉しいよ

結城君

ガバッ

結城君は黙って私を抱きしめた

私も結城君をぎゅって抱きしめる
結城君の体、暖かい
なんだろう？この気持ちよさ

「先生キスしてもいいかな？」

「いいよ」

私と、結城君の唇がゆっくりゆっくり、重なっていく
私と結城君の始めての強引ではない、優しいキス

あああ優しいキスってこんなに気持ちいいんだ
私は、体だけでなく心も暖まっていた

第5話 キミノコト教えて？（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます

感想、アドバイスよろしくお願いします

第6話 誰かに見られた？

「センス、今日さ先生の家行ってもいい？」

「いいよ。明日土曜日だから泊まってく？」

「マジで！？泊まってく泊まってく」

私達は、理科準備室で話をしている

私達の関係がバレたらヤバイから、こうやって学校ではこそこそ会って話をしている

時間は、ほとんどの生徒が帰ったくらいの夕方

こうやってる時間が結構落ち着いたりするもんだ

「先生さ、俺の事もっと知りたいって言ってたけど知れた？」

結城君が片手にコーヒーで聞いてきた

コーヒーを持つてる結城君は結構絵になってカッコいい

「んゝあんまりかな？」

結構結城君わかりやすそうでわかりにくいんだよね

「そっか、俺は先生の事知れたよっゝスリーサイズとかも」

「何でそんなこと知ってるの??？」

私は、かなり動揺した

顔に、動揺してまゝすって文字がでるぐらい

「俺の、眼なめちゃ困るよパツと見でスリーサイズぐらいわかるん

だから」

「それは、それで凄いねあんまり実用的じゃないけど」

「うーん・・・まあそだね」

相変わらずの軽い感じで返事をする結城君

結城君がいきなり私に迫って来た

「ちょっ結城君？」

そして「センス、見た目より胸デカいんだね」私の耳元でささやく

「バカっ結城君のエッチ！！」私は、結城君を突き飛ばした

「痛ってええ」結城君の背中が壁にぶつかったみたい

「ゴメン結城君でも結城君が変なこと言うから」

私は、しょんぼりしていた

だって、人を突き飛ばすなんて本当はやってはいけない行為なんだからやっぱりやったら申し訳なさそうにしとかないと

「痛かったな」

「だから、謝ってるじゃん」

「謝られても痛いのは治らないよ」

もっつ結城君、意地悪なんだから

「じゃあ、どうすれば許してくれるの？」

「先生がキスしてくれた許してあげる」

「本当？」

「本当」

結城君が、頷く

私は、ゆっくり結城君に近付き、結城君の肩にそつと手を置く
そして、ゆっくりと唇を重ねて、口漬けをしていく

「・・・んっ」

変な声だしちゃった

恥ずかしいよ（汗）

結城君に変な目で見られてないかな

「センセ、そのエロい声ずりいよ」

結城君は、顔を真っ赤にして私から離れて行った

エロいって、ええ変な声じゃなくてエロい声だったかなあ？

「これで、許してくれるんでしょ結城君」

「うん・・・」結城君は、まだ顔を赤くしている
自分から言ってきたのにやっぱりまだ子供なんだな
私は、心の中で頷く

そんな感じで私達がラブラブモードに入っていると「ガタンっ」ドア

の外で物音がした

やばっ誰かに見られたかも

これが、校長先生や、理事長にバレたら私教師辞めさせられるようにしよう

こんな学校でも頑張ってるのに

「結城君見られてたらどうしよう?」

私は、結城君に近寄り腕を掴みながら言った

「どうしようって、見つかったらそんな時でしょっ。もしかしたら見られてないかもしれないし考えてもしょうがないべ」

そんな軽い感じでいいのかな?でも結城君の言うとおりだ考えてもしょうがない

でも、やっぱり心配だよな〜

「そうなのかな?」

「そうそう、」

結城君は笑いながら言った。結城君はよくそんな笑顔で居られるよね
不思議だな〜

ちよっぴりそんな結城君に憧れてたりして

「でも心配だよ」

「大丈夫大丈夫もしバレたらなんとか誤魔化しければいいって」

「そっだよね・・・そっだよね」

「何で2回言ったの？」

うつ痛いところ突いてくるなあ

「自分でもわかんない（笑）」

「何それっ？」

私達は、大爆笑した

もちろん外には漏れない程度の小さい声でだよっ

「センセ一端俺帰るわ」

「うつうん」

そっかもう帰るんだ。まあもう6時だしね
私も仕事終わらせないと

「じゃあ、ねえ先生また後で家行くから」

「オツケ~~~~イ バイバイ」

ガラッ 結城君は準備室から出て行った

さあ私も職員室行かないと

第6話 誰かに見られた？（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
感想、アドバイスよろしくです

第7話 湊ちゃん♪

「せんせーい」

そう言つて結城君が手を振っている

今日は、結城君と付き合い始めてから初めての外出デート♪

今までは、バレたらやばいと言うことで理科準備室と私の家で、話をしたり遊んだりしていたけど、今回は、思い切つて外出を試みた

でも、見つかったら困るので学校付近からかなり離れたたショッピングモール「イオン」に来ている

「お待ちせ結城君」

私は、そう言つて結城君の手を掴む

「先生遅いよ」

「ゴメン、ゴメン寝坊しちゃつて」

「まあいいんだけどさ。俺も寝坊しちゃつたし」

「そうなのっ？じゃあ、おあいこつて事で行こうか」

私は、結城君の手を引っ張り二階に上るエスカレーターに向つた

「先生、どこ行きたい？」

結城君が口を開く

「うーん……本屋とか？」

「おkじゃあ、本屋行こうか。でも、センス服屋とか行かないでい

いの？」

「いいのいいの、私そんなにオシャレには興味ないから」

服屋に行ったとしても結局買わないしね

やっぱり、本屋でおもしろそうな小説探すのが私にあうんだよね

「先生は、オシャレな服とか似合いそうなんだけどな」結城君が、ボソッと呟く

私は、なんとなく服の話をするのは嫌だったので、無視した
だって、男の子と服見るの嫌じゃん

「ささっ、面白そうな小説探そっ！」私が、小説コーナー的なところ
に向うと、トコトコ結城君がついてきた

何か、子供みたいで可愛いっ」

まあまだ、子供なだけだよ

私がいるんな小説を手にとって、あらすじやら内容を流し読みして
いると

「先生、こんな難しい本読んでんだ……俺こんなん読んできると
頭痛くなりそうだよ」

「そうなんだ（苦笑）結城君は本とか読まないの？」

「読むっちゃあ読むんだけどほとんど漫画かな」

すっごい男の子らしいな結城君は

「結構、小説も面白いよ。絵を自分で想像することか」

「そうかな？」

結城君が首をかしげる

「そうそう、私がオススメのやつ一冊買ってあげるから読んでみなよ」

「先生が買ってくれるんなら読んでみてもいいかな」

「じゃあ決まりね、この小説オススメだから読んでみてね」
私は、2冊の本をレジに持っていく
ちなみに、もう1冊は私が好きな作家の新作
そして、お金を払って本屋から出た

「腹減ったね。なんか食う？」

結城君がお腹をさすりながら言う

「そうだね、なんか食べようか」

私もお腹をさすりながら言う

「先生何食べたい？」

「私は、何でもいいよ結城君が食べたいもの食べよう」

「じゃあ・・・ラーメンでも食べようか」

結城君がすっごい笑顔で言う

この結城君可愛いなあ

「そうしようか。」

私たちは、イオン内にあるラーメン屋で食べることにした

「先生、ここ入ろうか」

「オツケイ」

私たちは、店内に入り席へ付いた

「先生何食べる？」

結城君がメニューを手に取る
私も、メニューを手に取った

「うゝん私は、塩ラーメンにしようかな」

「じゃあ、俺はとんこつにしよう」

私達は、店員を呼び注文をした

「あのさ、結城君。私達付き合い始めて結構経ってるし、先生って呼び方は辞めてくれないかな？」

正直、先生って呼ばれるとなんか嫌だ

「いいけど、じゃあ何て呼べばいいの？」

「・・・・・・・・・・」

それは、考えていなかった。どうしよう湊とか呼び捨ては嫌だし、かと言って大槻さんとかも嫌だし

私が、考えていると結城君が話だした

「じゃあ、湊ちゃんでもいい？」

湊ちゃん・・・・・・・・それならいいかも、少し恥ずかしいけど親近感も

あるし

「じゃあ、それで」

私は、少し顔を赤くした

「じゃあ、これからは湊ちゃんって呼ぶね」

「うん」

私たちが、話をしているとラーメンがきた

「「いあたたきまゝす」」

私達は、声をそろえて言う

「あゝオイシ」

ここの塩ラーメンおいしいな、海苔とか入ってるしチャーシューも
柔らかくて最高

私が嫌いなメンマも入ってないし

結城君を見ると黙々とラーメンを食べ続けている

「結城君のちよつとちようだい」

「いいよ、そのかわり湊ちゃんのもちようだいね」

私達は、ラーメンを交換し一口食べた

「とんこつもおいしいね」

私が、笑顔で言う

「塩は・・・まあまあかな」

結城君は少し不満なそうな顔で言った

「塩嫌いなのか？」

「んゝ嫌いってわけじゃないけど、俺とんこつが一番好きだから」

「私よりも好き？」

「………何言っただ私は」

「こんなんじゃない、変なこと言うガキと一緒にじゃん」

「結城君変な気持ちになってないかな？」

「そんなわけないよ。俺が一番好きなのは、大事なものは湊ちゃんだよ」

「結城君こんな変な質問にも真面目に答えてくれるんだ」

「結城君って不良だけど、不良じゃない感じだなあ」

「そっか、ありがとう。結城君」

「？」

「結城君は首をかしげている」

「何でありがとうって言われたかわからないのかな？」

「私達は、ラーメンを食べ終わると店を出た」

「おいしかったね」

「そだね」

「そんな他愛もない会話と共に私達のデートは続いた」

第7話 湊ちゃん♪（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
感想、アドバイスよろしくお願いします

最終話 もう大丈夫

「スイマセンでした先生！」

私が、廊下を歩いてると私にジューズをかけてきた生徒がいきなり謝ってきた

「あなたが、結城さんの女とは知らずにあんな失礼なの事をしてしまい、すいませんでした」

やっぱりバレたんだ結城君とのこと・・・かなりマズいな

「いいよ別にもう気にしてないから」

「ありがとうございます！！」

結城君2年の番長っていうのは本当なんだ
だって私が、結城君と付き合ってるってだけでこんな態度変わるんだもん

「じゃ、じゃあね」

私は、適当にあしらって職員室に向った

ガラッ

私が、職員室のドアを開けると校長先生と結城君がいた

ちよっ何で結城君が居るのやっぱり呼び出しかな？

「ちようどいいところに来たね大槻先生、さあ座ってくれたまえ」
校長先生がイスに座りながらイスを指差す

「はい……」

私は、ゆっくりイスに座った

「さっそく本題に入るが君が、冴島君と付きあってるって噂があるのだが本当かね？」

校長先生が腕を組みながら聞いてきた

「はい……事実です。すみません！！私が教師を辞職するので冴島君を退学にするのは辞めてください！」

私は、イスから立ち上がり頭を下げた

「いやそうじゃないんだ。君達が交際するのを学校側も認めると言う話だったんだが……」

校長先生が苦笑いをしながら言っている

「へっ？」

「この高校は荒れに荒れているだろう？だからね、もう何があっても全然問題にもならないんだ

冴島君に聞いてみたら、真面目に付き合ってるそうじゃないか。だからもう、コソコソしなくてもいいよ」

「ありがとうございます……」
ドンッ

私は、緊張の糸が切れてイスに崩れるように座った

そうだったんだ、良かった〜

てつきり、辞めさせられると思っただよ〜

でも、よかったな結城君とこれからも付き合えるわけだし

「じゃあ、俺教室帰りますね」

「うむ」

結城君は、職員室から出て行った

「私も、授業があるのでこれで失礼します」

「うむ」

校長アンタはその返事しかできんのかい！

「失礼しました」

私も、職員室から出た

そして、教室に向った

・・・・・・・・・・・・・・・・

今日の、授業が終わった

授業は、みんなビックリするぐらい真面目に受けてくれたな

私が、結城君の彼女だからかな？

それにしても、みんなが授業真面目に受けてくれたから嬉しかったな

私は、自分の机で明日の授業の準備をしていた

ピロリィン

結城君からメールだ

「今から理科準備室に来て」と書いてあった

私は、理科準備室に向った

ガラッ

理科準備室のドアを開ける

「誰かいる？」

「いるよ」

あつ結城君の声だ

結城君が奥から出てきた

よいしょ

私は、床に座った

「で、何か用事でもあったの？」

私が、隣に座ってる結城君に聞く

「別に、湊ちゃんと喋りたかっただけ」

「そっか」

正直嬉しかった

「朝のさ湊ちゃんの言葉嬉しかった。湊ちゃんが俺の事本気で想ってくれてるのがわかったから」

朝？

「私が教師を辞職するので冴島君を退学にするのは辞めてください」
多分これだな

「私も嬉しいよ。結城君と別れなきゃっていう心配がなくなったから」

「これで、もう大丈夫だね」

「うん。これでもう大丈夫」

「湊ちゃん。好きだよ」

「私も、好きだよ結城君が」

結城君は、私を抱きしめキスをした

強引じゃなくて優しいキス

ああやっぱり結城君といると落ち着くな……

準備室の窓から夕方6時の夕日が差し込む

まるで私たちを祝福してくれているかのように

私達が出会ったのが夕方の理科準備室

結城君に告白されたのも、初めてキスされたのも夕方の理科準備室

私達の愛を育んだのも夕方の理科準備室

そして、私達が永遠の愛を誓ったのも夕方の理科準備室

まあこれは、もうちょっと先の話

私達を結びつけた夕方の理科準備室

本当に感謝しないとな準備室には……

「湊ちゃん、帰ろうか」

「うん……」

ありがとうございます理科準備室さん♪

最終話 もう大丈夫（後書き）

最後の最後まで読んで下さってありがとうございます
なんか変な終わり方ですいません
感想お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8661k/>

夕方の理科準備室

2010年10月10日05時10分発行